

高こう  
野や  
山さん



景弘は、願いが叶い清盛の警護侍の一人として、六波羅の館に常駐していた。

五年も経つと、清盛の篤い信を得るまでになっていた。

父頼信は、嚴島神社神主、また佐西郡の郡司として、都に長居することは適わず、国許で過ごすことが多かった。

「景弘。そなたの思いのままに働くがよいぞ」

清盛は、そう景弘に指図し、六波羅の館や都での警護については、父忠盛以来の剛の者が役目を果たしていたことで、兵船の三艘を与えるなど、むしろ、景弘の働き場所として近海の警護を選んでいた。

景弘も国許から同道してきた小鷲丸だけでなく、多くの配下を従えるようになり、清盛は安芸地方だけでなく備前や伊予の海域にまで目の届く「西海の警固衆」としての役割を、景弘に課していた。

「瀬戸内のことなら、景弘に任せようぞ」

清盛からそう声をかけられた景弘は、小鷲丸と共にしばしば摂津の海へ出かけていた。

同時に景弘は、密かに都の周辺の山々だけでなく、近江や紀州、播磨の山間にまで探索の足を伸ばしていた。この探索には、芙蓉たち鞍馬の修行者の手を借りていた。

「鞍馬に籠る修行者の中には、紀州や熊野の山々の地理に明るい者が多く…」

という芙蓉の言葉どおり、景弘は、そこで得た知識や山伏たちとの付き合いを深めていた。中でも景弘の心を捉えていたものは、空海が創建した高野山に、清盛も特別な思いがあることだった。

景弘は、郡司の父が嚴島神社神官としての勤めを果たすため安芸国に詰めているのに対し、ずっと六波羅の清盛の許に侍衆の一人として留まっていた。

清盛に請うて、景弘が久しぶりに国許へ帰参したのは、八幡川が氾濫した危機のときであった。百年に一度の大あらし。それが吹くという話は、父からも聞かされていた。

「佐伯のお山が崩れた……」

そう伝えてきたのは、船でやってきた大野の赤人であった。

新たに配下となった郎党を引き連れ、小鷲丸と共に都から立ち戻った景弘は、鉄砲水に押し流された麓の惨状を目にして、心が痛んだ。父頼信と田所の伊佐は、対応に大童であった。こうした非常時に頼信が率いる佐伯軍団は格段の力を發揮した。

「まず、飲み水の供給を……」

田所の伊佐は、その確保にいち早く動いた。

郡司として頼信は、妻の萌子に命じて、屋敷の者や付近の住民に声をかけて、蔵の貯蔵米や穀類、そして漁師に魚介の調達を命じ山間の里から野菜を運ばせた。

極楽寺山は、名のとおり極楽寺の尊号を頂いていたが、あらしが吹くたびに荒れ狂う恐ろしい山であった。三宅の屋敷の東の谷は、古くから「滑川」ともよばれ、土石流が滑り落ちた。

洪水は八幡川流域だけに留まらず、東は鈴ヶ峯とも呼ばれる佐伯山の裾野まで埋没させ、地御前の浜までの広い範囲を汚泥で侵した。この被災住民のために、清盛は景弘の船に食料や漢方薬などを積み込ませ、見舞いの金銭も持たせていた。

若い景弘の到着を待っていた者に、かつての幼い頃の腕白仲間がいた。

景弘は小鷲丸と諮り、伊佐が拵えてくれた被災図を基に、精力的に支援物資を運ばせ、かつての仲間を率いて自ら住民の救助に向いていった。

小鷲丸が仕立ててきた大型船と小舟には、家を流されて震える村人たちの救済のための食料や衣料などが満載されていた。

「あれは、かげひろさま…」

「佐伯の若とのさま」

河口に横付けされた船に、村人たちは涙を流して伏し拝んだ。

景弘二十七才。清盛が安芸守に任じられてから十年の歳月が経っていた。

平清盛が、高野山金剛峰寺へ登山したのは、保元元年（一一五六年）の四月のことで、三年前に身罷った父忠盛の遺志を継いで清盛も根本大塔の補修に携わっていた。

この真言密教の聖地である高野山の寺社建立を強く欲したのは白河法皇であった。

造営は滞りなく完成し、この日、清盛は平家一門を従えて落慶法要に参上していた。

清盛は京から船で下り、大和街道を馬と輿を乗り継いで高野山へとやってきた。

景弘は、特に願ひ出て警護役に就いた。供の者三十人という小勢であったが、かつての忠盛の身边を警護していた何れも屈強の武人たちで、小鷲丸もその中にいた。

清盛が父忠盛の代官として高野山大塔造営のために初めて登山したのは、六年前のことであった。

当時、まだ二十過ぎの景弘も、清盛に従い初めて高野山へとやってきていた。

景弘は、高野山を開いた僧空海に、巖島を通じて馴染み深い思いがあった。

唐の国から戻った空海は、しばらく日本各地を旅して回った。讃岐の佐伯家の出自である空海が安芸国を訪れたのは、同族の佐伯家を頼つてのことだといわれ、神主家も空海の滞在を扶けた。

「我が先祖の許に空海上人は逗留なされた」

と、景弘も聞かされていた。

「空海上人が開いた巖島弥山…」

その霊峰への思いは、景弘の空海への篤い思いを植えつけていた。

景弘は磐座に坐す神々の巖かな神慮に加えて、仏法のいう「帰依」ということに、神への崇敬とはまた異なった「人間としての生々しさ」を感じていた。

「お浄土というもの…」について、父頼信は、神さまにはなかったものではないかと、告げていた。

仏が約束する「お浄土への旅立ち」は、ひたすら畏れ敬う神への「鎮護」の願いや、この宇宙を司る万物の支配者である神への、人々の平伏にはなかった「暖かな気持ち」を景弘に抱かせていた。

空海の説く仏法の教えには「命」というものへの真摯な思いが溢れていた。

万物には命が宿り、それには限りがあつて、やがて命は尽きる。

神は、その死を忌む。

しかし、仏は、死からの救済を説いた。

「高野山には、何処か巖島の弥山に通じる同じ匂いがある…」

景弘は、そう思うことがあつた。

それは、空海上人が救闇持法を修したという巖島の霊峰を幼い頃から攀登してきた景弘にとって、どこか懐かしい、共通した霊山の気配といったものがあつたからだった。

清盛が高野山の寝所で目覚めたのは、まだ夜明けには早い時刻であつた。短い夢を見ていた。

晩春とはいえ、高野山の未明はひどく冷えた。板戸を引き回した宿坊の寝所には、宿直の者の手で焚かれた火も消え、火桶の燠も僅かばかりの灰を残すだけになつていた。

「はて…」

昨夜は、遅くまで西行と話し込んだ。

西行が清盛から「高野山で修行せぬか」と声をかけられたのは二年前のことであつた。

宿坊の警護侍と共にいた景弘が運んできた伏見の酒の酔いは、まだ清盛を半ば夢路に留めており、清盛ははきとせぬ頭で昨夜のことを思い返していた。

「食膳に供された酒を飲み、酔つて寝所に向かつた…」

寝所の褥の傍らに、白絹の寝衣を纏つた娘が侍つていた記憶がぼんやりとあつた。

「あれは、夢であつたか…」

暁闇の中で、清盛はひとり目覚めていた。

清盛は、寝所を出ると小用に立つた。

東の空が白みはじめたかと思つたが、峰の稜線りやうせんを際立たせながら、赤みを帯びた二十六夜の月が四半分ほど姿を見せていた。

清盛は寝衣しんいのまま腰刀も帯びず、宿坊の階から、薄明の中、造営成つたばかりの大塔を眺めた。

「あの明かりは、奥の院あたり…」

金剛峰寺から奥の院までは、半里の山道。

清盛は、気がつくと、奥の院にいた。

奥の院には、空海が祀まつられている廟びやうがあつた。その廟びやうの前に、手燭てしよくを掲げた老僧がいて、清盛を窺うかがっていた。

「彼方かなたから見えた明かりは、この老僧の手燭てしよくの光であつたか…」

清盛は、明かりに誘われるように、ここまで山道たをを辿つてきていた。

「平清盛どの…」

老僧は、そう呼びかけた。

「お前さまの高野での働き…まことに念の入つたることにて…」

清盛は、じつと老僧に目を凝らした。

髪ひげも髭ひげも真つ白で身に法体を示す墨染めの衣まをを纏まとつた老僧は、杖つえをつき、脚絆きゃはんに草鞋履わらじきの旅姿であつた。

折からの月明かりに、大塔は黒々と明けやらぬ空に浮かび、老僧は韻々いんいんと響く声で、清盛に大塔造営の労をねぎらい、この功德、きつと世の衆生を救い奉らん…と、宣した。

「人の世の安寧…われらが衷心より望み参らせることにて…」

そう、神妙に応えた清盛に、老僧は莞爾として頷くと、更に言葉を次いだ。

「西国の安芸国に、嚴島神社なる古き社あり。この社に祀られし神は、宗像の三姫なり。その神慮、船靈明神遣わし、瀬戸内の海の船人を安んじ、多くの草莽の民に豊穰をもたらしたり…」

清盛は得体の知れぬものに気圧されていた。

「越前国、氣比の社、盛んなること、清盛どのもとくと知っておろう。それに比べ、安芸国の嚴島神社の社著しく荒廢し、あつてなしが如し…」

老僧の声音は、清盛の耳を打った。

「平家一門の弥栄願うならば、きつとこの嚴島明神神殿の築上、心して果たすがよい」

清盛が高野山の靈氣に打たれたが如く、空海の靈場で身を縛られる思いに遇ったのは、まだ先ほどの「夢の続きのような気分半ば」のことであった。

「あの老僧こそ、空海上人さま…」

この高野山の即身成仏を目指す教義にあるとおり、入唐した空海が大日如来を真実の仏として崇めた如く、清盛は、老僧の告げた嚴島の新たな社殿造営に、自らの身を成仏させる想像に囚われていた。同時に清盛は、父忠盛の氣比神宮への信仰の深さを思った。

「南無大師遍照金剛…」

清盛は、思わず、そう唱えていた。

これは『平家物語』の大塔建立の巻により、後世に伝えられるとおりである。

夜は白々と明けていた。

大塔の石の階に座り込んでいた清盛は、宿坊から出てきた人影に声をかけられ、そこにいる景弘に気づいた。

「朝早うから、如何なされました…」

朝の冷気に体は冷え切っていたが、清盛はひどく熱っぽく火照っていた。

「景弘。厳島の社は、かようなまでに傷みおるか…」

清盛は、傍らの景弘に、そう質した。

「何分にも、長年の間、雨風に晒されておりますゆえ…」

と、景弘は控えめに応えた。

景弘の肩に縋りつくようにして清盛は宿坊の寢所に戻ると、そのまま寢床で昏々と眠った。この日から数日の間、高熱を發した清盛は、宿坊の床にいた。

「あれは、確かに空海上人…」

清盛は、夢の続きのような記憶の中で、奥の院で対面した旅姿の老僧の言葉を何度も思い返していた。

「三百余年の歳月を経て甦ったお大師さまの、亡霊であったか…」

奥の院で老僧から託宣された出来事のほか、宿坊での清盛の記憶は悉く消えていた。

高野山の修行僧の中に、西行の姿を見つけた景弘は、その再会を喜んだ。

「清盛どのお導きで、当山で修行しておる」

人の縁というものの、奇妙さや結びつきの面白さに、景弘は、いつも神慮というものを感じた。とりわ

け、その繋がりの中で、強く自分を惹きつけて止まない「絆」というものに、景弘は、自分を成長させていく原動力がある…と、思った。

「西行さまとのご縁も、私にとって神仏の導き。こうした人との繋がりをもって、私は清盛さまにお仕えすることができま…」

景弘は、人の縁がつくりあげていく豊かで大きなものを感じていた。

「その行く手にある光明…」

景弘にとって、西行との縁がそれだった。

この十年の間に何度か西行とは会っていた。初めて鞍馬の山に訪ねてきて以来、西行も若い景弘との出会いを悦んでいた。

「巫女も、高野山へ参っておったか」

西行は、短くそれだけ尋ねた。

「はい」

顔いた景弘は、これも仏さまのお力を得たもの…と、神妙に応えた。

「庵主さまも、つつがなく…」

西行は、景弘に、息災ならば重畳…と、微笑んでみせた。

その頃、高野山の峰みちを、マシラの如く走り下ってゆく娘がいた。風のように姿を晦ました美しい娘を、芙蓉だと認めたものはいなかった。